

平成27年6月19日(土)

老球の細道140号

勝利は敗北の彼方に

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「誰も文句を言わなくなった時が、いよいよ本当の危機だ。夫婦もけんかをしているうちはいいが、口もきかなくなったら危ない。最後はどちらかが黙って家を出て行く。会社も、社員が社長の悪口を言っている時はいいが、本当に経営が危なくなれば、社員は黙って辞めていく。」(『日本の論点2012』文藝春秋)

日本の経済界の重鎮が「経営者も最近は、もう政治に何を言っても仕方がないとあきらめかけている」として、上記のようなコメントを発している。

私も現役コーチだった頃、色々な大会において自チームのあまりのひどさに声を失ってしまったことが何度もあった。いつも同じパターンでミスを起こし、いつも同じパターンでズルズルと離されていく。決して盛り返していくという粘り強さが見られない。指導者の私が声を失い、何を言ってもしかたがないとあきらめてしまったからだろう。

チームが強かった時は、私があきらめても選手達がんばり、何とか盛り返してくれていたのだが……。チームに実力がないときは期待できない。そんなことを期待すること自体コーチとして失格である。私の公認コーチ資格は「コーチ失格」と名称変更しなければならなかっただろう。

最後にコーチしたチームは地区大会ですら優勝できないで終わってしまった。決勝リーグ常連にはなったが優勝までにはまだまだ遠かった。「勝てない症候群」はかなり重症である。会津バスケットボール協会会長で医師の松井先生からは「室井先生！血圧が正常値だから勝てないんじゃない！」と檄をとばされたこともあった。妻からは「最近試合前になっても寝言で叫ばなくなったよ！」と揶揄されたりもした。日本のトップコーチは勝利のために家庭か自分の身体を壊すと真しやかに言われていた。当時私はまだどれも壊れていなかった。本気がたりなかったのだろうか。

勝利はたくさん敗北の後に突然やって来る。勝つコーチ達は「その時」が来るまで決してあきらめない。あきらめたら最後、勝利は永遠の彼方に走り去ってしまう。成功する人たちの魔法の言葉は「あきらめない」の一言。

今まであきらめそうになったときに決まって思い出す詩がある。『もう一息』。

「もう一息

もう一息という処で、くたばっては

何事もものにならない

もう一息

もう一息

それをもう一息

それに打ち克つてもう一息

もうだめだ

それはもう一息

勝利は大変だ

だが、もう一息」

・・・・武者小路実篤・・・・